

られており、採集地点も極めて少ない。

引用文献

角野康郎, 1994. 日本水草図鑑. 80~83pp. 文一総合出版. 東京.

環境庁自然保護局, 1992. 緊急に保護を要する動物植物の種の選定調査「維管束植物種都道府県別分布表」. 179pp.

(1995年11月25日受理)

黒部峡谷探訪 —沿線の樹木—

若林一成

938 宇奈月町栃屋1813

A Trip along Kurobe Valley, Especially about the Trees

Kazunari Wakabayashi

1813, Tochiya-Unazuki-machi, 938

平成7年11月30日、黒部峡谷鉄道旅客運転最終日、黒部峡谷をたずねる。

(1) 鉄道沿線の樹木分布の特徴

1 宇名月駅(標高224m)～森石駅(標高309m)

トチノキ、カツラ、ケヤキ、オニグルミ等の巨木や大木がある。それに、ウラジロガシ、イタヤカエデ等もある。

2 森石駅(309m)～笹平駅(327m)

ウラジロガシはなくなり、ミズナラ、コナラ、ブナ等が優位を占め、黒部峡谷の樹木を代表するツガ、クロベがちらほら見えて来る(図1)。

3 笹平駅(327m)～猫又駅(358m)

峡谷鉄道の職員が樹木につけた名札が目に入る。ミズメ、イタヤカエデ、アワブキ、ヤマグワ、スギ、ナナカマド、クサギ、ヒノキ、ケヤキ、オニグルミ。

ミズメを黒部で初めて知った。しかし、よく観察すると、黒部川流域の標高250m位の山腹でも大木がある。

4 猫又駅(358m)～鐘釣駅(443m)

鐘釣駅で下車する。そして、露天風呂のある川原まで下りる。途中、平地にカツラの巨木がある。その根元から7本も株立ちしており、しかも、その1本1本が天高く、真っ直ぐ立っている。久しく雪崩れない平地である証であろうか。その下に鐘釣の山小屋(鐘釣観光温泉株式会社社長中ハルエ)があった。

名札のついている樹木: ヤマハンノキ、アワブキ、サワグルミ、クマノミズキ、ミズキ、カツラ、ヤマボウシ、フサザクラここへ来ると、オニグルミはなくなり、サワグルミが目立つ(図2)。

H7年11月30日、黒部峡谷(326m)そば後曳橋左岸山腹。岸壁と尾根に常緑樹、沢に落葉樹。トンネル左側にクロヒがあった。



H7年11月30日、鐘釣温泉の鐘釣の山小屋(標高460m)付近の真っ直ぐに株立ちしたカツラの巨木。



樺平(599m)付近。黒部川本流と祖母谷川との合流点。兩岸の岸壁に常緑樹ツガ、クロベ、ヒメコマツ等が茂っている。

5 鐘釣駅(443m)～樺平駅(599m)

鐘釣駅周辺では、雪は全然なかったが、標高500m過ぎた小屋平駅(531m)では駅周辺が雪で白くなっていた。

樺平駅周辺ではもう雪で、名剣温泉前の遊歩道では雪の深い所で15cmも積もっていた。樺平駅周辺では、高木としてサワグルミ(林)、ケヤキ、

ミズナラ、ツガ、クロベ、ヒメコマツ等を見ることができる。猿飛峡(特別天然記念物)近くではアシオスギの大木もある(図3)。

(2) 黒部峡谷上流の樹相の特徴

岩壁にツガ、キタゴヨウ、クロベ等の常緑樹が多い。

樺平駅標高599m、その対岸の殆ど、垂直に切り立った岩壁の山、奥鐘山標高1543m、その標高差944m。1000m近くの標高差があるためか、山の麓と中腹と山頂では植生や紅葉

等の様子が違う。

深い峡谷特有の気象のためか、黒部扇状地では普通、標高400～500mから生えるブナが標高300m代の笹平駅付近でも沢山観察できる。樹木の垂直分布の下降が見られることである。

(1995年12月25日受理)

アメリカ東部の自然科学博物館を見て

布村 昇
富山市科学文化センター

A Trip to Science Museums of East Areas of USA.

Noboru Nunomura
Toyama Science Museum

1995年秋、富山市の姉妹都市である、ノースカロライナ州のダーラム市を含め、アメリカ東部の都市の博物館を訪れる機会に恵まれたので、自然史系博物館を中心に紹介する。

1. アメリカ国立自然史博物館

National Museum of Natural History

最初はアメリカの首都、ワシントンを訪れた。ホテルから地下鉄を乗り継ぎ、スミソニアン研究所の一つ、アメリカ国立自然史博物館 National Museum of Natural History へ行った。ワラジムシ類の大家、ケンスレー博士を訪ねるはずであったが、ちょうどヨーロッパ出張のため、寄生性甲殻類を研究している若手のグライガー博士が出迎えてくれた。研究収蔵棟を見たいと申し出てあったが、そこに入るため、守衛室でサインし、身分証明を見せ、博士の案内で研究室や収蔵庫を見学できた。研究・収蔵庫へ入るまでに2度の電気錠があり、かつ職員も含め、全て写真付きの身分証明書を胸に付けるという厳しいものであったが、



アメリカ国立自然史博物館

研究室と収蔵庫の間には全く鍵が無かった。

なお、当日は年1回の研究者同士の内部の研究の紹介する日、「ワーキングデー」で、「腔腸動物」「線虫」「カイメン」といった部門毎に新収蔵の標本など簡単なディスプレイを行って、館内の他の研究者と交流をしていた。千名を越す研究者がいるとこのような交流が必要になるのであろう。線虫の部門などは顕微鏡下で生きた数万のセンチ



訪問した都市位置図



ダイオウグソクムシへのタッチを
すすめたボランティア